

かささぎ通信 第152号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 10月 10日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

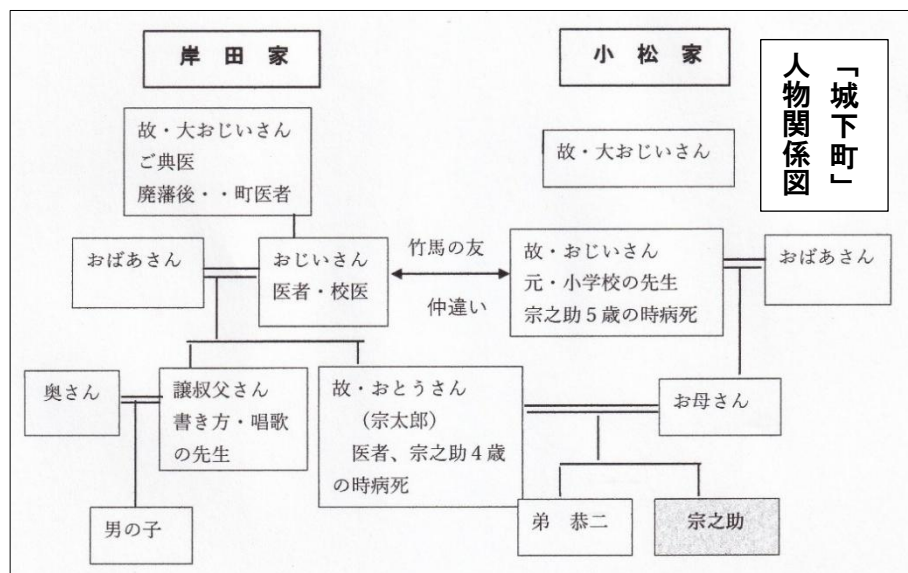
2025年9月の「森三郎の作品を読む会」では、「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月)を読みました。

1936年10月に『赤い鳥』鈴木三重吉追悼号刊行後、森三郎は1942年『昔の笑ひばなし』(中央公論社)『かささぎ物語』(帝国教育会出版部)、1943年『うぐいすの謡』(拓南社)『雪こんこんお寺の柿の木』(泰光堂)の四冊の単行本を刊行しました。その後、1945年3月10日、5月26日と空襲によって二度罹災し、6月2日に刈谷に戻り、それ以降は1993年に82歳で亡くなるまで生まれ育った刈谷の家で過ごしました。今回読み合わせた「城下町」は、酒井晶代先生の調査で分かっている限りでは、三郎が刈谷に戻って戦後初めて公にされた作品です。会では2017年10、11月に「城下町」を取り上げました(「かささぎ通信」第61、62号)。「東海道筋から少し入った小さな城下町」を舞台にしたこの作品を、この時期に発表した三郎の思いも今回は探れたらよいと思います。

作品は主人公・宗之助の生い立ちについて、三代前のおおじいさんの代から話が始まります。父方の岸田のおおじいさんは江戸時代末期の御典医で廃藩後町医者になりました。宗之助の父方、母方(小松)のおおじいさんは竹馬の友であり、その縁で父母は結婚することになったのです。しかし、宗之助が四歳の時、医者だったお父さんは亡くなってしまいます。すると竹馬の友というほど仲の良かった両方のおおじいさんが仲違いし、母方の小松のおおじいさんは母親と宗之助とを家に連れてきてしまい、それ以来両家は口一つ聞かない間柄になってしまいました。その翌年、小松のおおじいさんがなくなり、お母さんのお腹にいた弟の恭二が生まれます。恭二はお父さんの顔も見たことがないのです。小松の家は今ではおばあさん・お母さん・宗之助・恭二の四大家族です。大人たちの事情で、父方の岸田のおおじいさん・おばあさんと話すことも無い宗之助ですが、作品中にはこれから少しずつ関係

が出てきます。

そこに刈谷と思しき地方都市の変化していく様が描かれているので、今後の展開に興味を湧きます。3回の連続で読み合わせる予定です。



〈次回予定〉

2025年11月14日(金) 午後1時半~3時半

「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月) 続きを読む

愛知県令和7年度ボランティア活動功労者表彰受賞

「森三郎刈谷市民の会」は今年度のボランティア活動功労者表彰を受賞しました。十年以上にわたり、月に一回以上のボランティア活動を行っている団体として推薦していただきました。「読む会」「森三郎に親しむ集い」「森三郎童話を楽しむ会」「紙芝居制作と上演」「イメージ画展」など様々な方法でおこなった森三郎童話を広める活動が評価され感謝しています。